常山紀談 拾遺 三

和書門	
類	四二三〇一
號	三九
函	一七
架	二
冊	

內閣文庫	
和書類	四二三〇一號
一七冊	一七〇函
八架	

內閣文庫		
番號	和	42301
冊數	17	(15)
函號	170	49

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

常山紀談拾遺巻之三目次

一相図の旗といふ事
一武田信玄相図の旗を用ゆる事
一保科弾正信及高遠小篭城の事
一上杉景勝家上義元と合戦の事
一美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鉄炮迫合の事
一甲斐山縣同心長坂重左衛門の事
一信玄小田原発向の時根来法師一番鎗の事
一輝政公岐阜攻貝吹右衛門が事
一朝鮮陣の時兵器を塗馬糞にて乾せし事
一松永弾正久秀が馬の事

浅草文庫

一輝政公関ヶ原行軍順見の事
一大河を渡る心得の事
一大阪陣の時利隆武者奉行の事
一同役池田の諸士頻當る之事
一冑の頭心得の事
一上杉謙信馬印の事
一大坂真陣井伊家士小笠原傳兵衛手柄の事
一信玄嫡子義信と不和の事
一大阪にて石川宗左衛門、江坂清次郎組討の事
一藤堂の士田中權右衛門組討の事
一大阪冬陣上泉義郷指物の事
一東照宮と越前少将忠直卿御不和の起原の事
一大阪の役木村長門守を井伊家へ撃取事
一松平讃岐守殿具足屋岩井孫四郎物語の事
一米倉丹後ゞ子彦十郎鉄炮疵妙薬の事
一佐野修理亮宗綱長尾但馬守顕長合戦の事
一上杉弥五郎ゞ事
一佐久間河内守物語并渡邊内藏助ゞ狂哥の事

常山紀談拾遺卷之三

備藩　湯淺　元禎　述
同男　明善　校

○相圖の旗といふことあり甲陽家に於ても萩原常陸守と云大剛の武士伊勢浦の獵をなりふ山上に於て相圖をあしその相圖に依て魚を捕るを見て是に依て工夫をなして相図の證據旗と云ことを為せり則信虎の世に駿河今川の家臣福島といふ武功の士甲列を取て我國にせんとて駿遠の人數大軍を以て甲及へ押入已に武田滅亡せんとせしに常陸守件の證拠旗の相図を以て軍に勝ち敵の大將福島をも討取りしとあり是小旗にようて大利を得

なりけり

○武田信玄新田足利へ焼働し玉ふるに敵城の高き〻小旗を置て敵の出る出ざるその旗の相図によりて知るべし虚實をなかつて敵の宿城を焼働き玉ひけり

○信及高遠の城は保科彈正サ七騎にて篭城のるに小笠原一万の人數を以て攻之るのるに彈正郷民を大勢かりて見せ勢となしそれは旗を多くかつて見せ旗とかゝ又山上は相図の旗を置き敵の押來るに半途ゆして相図の旗を振て石弓をやるし敵の人數をきりて終ゆサ七騎を以て勝利を得なり

○上杉景勝家上義元と合戦直江兼継長谷堂口を引拂溝口左馬助勝路直江ゆ向て曰く夜は入て人數引取假なれば大敗軍ゆ成べし假今夜を堅固の地は陣取明朝引取玉へと申るまゝ直江も最と同じ一里計引取て小高き所の野山左り半道計り行く先は大山爰にて能所なるにて陣を取夜の明るを待謙信家の軍法懸り引といふてなぐゝふて引取るべ上杉の諸軍無恙米沢へぞ引取るゆあり時の陣取直江下知ゆて山より半道前ゆ陣取て山へかくらざるをを　家康公後々まで御称美ありとぞ

○美濃大垣ゆて八月廿四日より九月四日まで鉄炮迫合有るゆ輝政公と西国方とも迫合の間は數ありてそれなりて敵より鉄炮を放しかるゆ此數の敵を追

さらひ此方へ取て竹を切拂ひさうをすれもするを
可なりそを山脇源太夫竹村伊豆八田豊後あの三人の番
頭ふ仰付られ三人さもれ沮鉄炮を連て出張し敵を追拂
ひ藪を切さらひて三備そろに引退んとするそれ敵喰留
うるそれ八田氏殿後まを追かゝる敵を追拂んと足軽ふ
鉄炮を打さるに急なる場也あの〳〵打ごとしあのそれ
豊後長臣柏原杢右衛門足軽の中ふたしこのるそれ三人
をまゝき鉄炮ふ玉薬をつゝセ追ひ來り敵中へ杢右衛門
さりかゝ〳〵十四五程鉛子を放し馬上の敵三人程ふあを
そを主をを碎易しを敵引退うるそれ柏原も引退それふ
右の玉薬を込うる足軽の居處を見るに砂の中をありを

それ中ふ居て玉薬を込たるそれり完をありうる體を柏
原い不見急なるそれふよく堀てさりて玉薬を込うる
ことを笑うるとあり柏原へ柏原市右衛門先祖そり輝政公
より播磨の御普請場をを御褒美ふ段子の羽織を被下と
なりそれ謂まへ天下普請のそれ黒田殿の衆と口論し歯
を少しそられなぐら相手を切うをし利を得て金銀を以
て入歯をまゝるとあり此てを仰出うをかの入歯の者ろ
と有て御わゝび被下〳〵ものり

○甲刕家山形同心の士長坂重左衛門後ふ井伊家ふ仕へと
るそれ上泉義郷と武話ありしふ重左衛門が曰惣じを戦
場ふくたぐひふ鋭将先ふ進て利ある戦地を取んと欲る

それ我方は其地利の場をそなへるゆえ其場をそなへ
否や鋭卒ふ一放づつきかひをとりて鉛子を放さすべし
不然それ〳〵能場をそなへて勝を得ずしてど
も鋭将の功を先賞をるこれ〳〵其場をそなへるまでも也
それ場をそなへたるまでなりそれ場をこの方へ取る
やいなや鋭子を放するそれい鋭将の功いちぢる此徳
を可考知とそなり

○信玄小田原發向のそれ小田原の蓮池ふ於てそひ大貳と
云根來法師の第一番鎗わそつづれ進んで旗本衆の二
番やりいやなりと云て捨て刀をぬきて敵へ切かゝる
首をそりゝる云ふと是向ふ渡りあり

○輝政公関原合戦の前岐阜の城攻はそれ合渡の川向ふ岐
阜勢出て此方よりそなるを待かけるふ池田の御入數
敵を見て進ミかゝるを切崩そんとゝそなるを輝政公兵
機をたくまくせんそれふ押へ〳〵かゝらせまれど見つ
くろはせそなるふ御貝吹貝吹右衛門武功ありたる者ふて
寅早進ミ貝を吹可然と申上げ合渡の川へ三里ばかり
まゝ貝を水まゝ通しかゝるを貝を大貝まて吹立るゆえ池田
の諸軍一同ふ川をそなりゝ其勢ふゝ御勝利なり貝
吹右衛門ハ武藤伊勢右衛門先祖なり貝吹右衛門中村勘
齊中村源右衛門先祖なり ゆゑ高録の貝役なり輝政公右御合戦以後
毎年元朝ふ表へ御出ありて始ゝ御言をかけらるゝハ貝

吹右衛門なり表へ御出ありしをりん目出度と吹右衛門
へ御言葉をかけらるゝそれ吹右衛門五百八十年御目出度
ござりまするとて御返答申上る御吉例なり右の
合渡の合戦のをりは吹たる大貝は大概長さ一尺五六寸
計もありしを息よりそれもの吹るゝ貝にはあらず一ちんと吹
たる福田市太夫若盛のときまでなり右の御合戦御勝利
以後関が原御一戦　東照君御利運なく輝政公段々数
国を封ぜられ播磨備前淡路三ケ国の大守となり百万
石の俸禄を得玉ふゆへまこの大貝を指て三ケ国百万石
を吹出したる御貝なし宝器となりたるものの由なり
○朝鮮陣の時は甲冑兵器損じ諸軍難義なりしに後々は銘々

漆を以て葺補せしとあり漆ぬりても風呂なきゆへなり
乾きかぬるかたく難儀せしに作意ある人ありて塗物
を置たる廻りに馬糞を集め置たれば一夜究に干たりと迚
○馬は人氣あるやためよりよき氣つかれ馬なりとて戦場
長陣はあまんぐるしいうちに氣つよく悪相ある馬も長
陣までは孫ら如くなるやなり松永弾正久秀の乗たる
馬を八田豊後求て大坂陣のころ乗たるに人氣ありてそれ
めづらしを吉介といふ異相の馬取ありて轡を持てか
るゆへ前足をひげく喰んと口を明てかゝらずそれ轡をそは
せらく牽出せしなり此馬大阪陣以後あの馬を駿府の
島田へ買駄馬となりたるに其以後四五年も小荷駄にて

荷を付て若馬の如くふのまとありて氣性つよく紀馬
なる中へ此の如くうるさくうるさくありし八田正久大阪陣の
ころ紀十八歳なりしに兄久次若きものなる中へ下部なれ
ども度々戦場へ出て度々逢うる者なりとて右の馬取の
吉介を正久の馬取とせし付らるるを大阪夏陣落城の
ころ崩口へ塊付の首を取らるるを敵を鎗付け突伏せ
首を取らるるを吉介云ふ〜敵の刀をそり玉へ不然
ころ紀いそれ敵の分量知るがうるさと云て正久へ同心へ無
之を右の敵の刀を取うるさるるを件の刀高田の刀ふく朱
鞘なりしとなり初鎗合のとき正久の鑓の太刀打を敵刀
を以て切拂ひうるさる紀双をれうるやまとへその初より
折うるを右の分捕の刀打の処大豆粒など双をれうる
中へ塊へ小田原盛の金そびるて終不見能き盛なりと云
り然るを池田利隆の手へて塊付の首三つうるでへ無之
中へ塊を付て御旗本へ遣せし中へ八田家へうるるるる
○行軍のころ紀大将諸軍を巡を見玉ふて古法なり関ヶ原合
戦の行軍のころ紀池田輝政公諸卒の左の方をべさしと
乗出し先手まで乗行て先手の先へて馬を右の方へ折り
諸卒の右の方を地道へ乗て後陣まで順見ありうるるる
戻りへ地道をのりうるるるて行き玉ふと
きうる諸卒前へゆくへ早道へのらざるるころへ乗ぬけが
たし先手の先までのりぬけ右の方へ折て押行く諸卒の

右の方へ乗て戻り玉ふを地道にて静うふのり戻り
ねらへとつゝども諸卒い先へゆくゆへ後陣まで地道ふ
くも間をもちぶして悉順見ありやを以てあり
○大河をまくるをれい駒武者を川上を渡させ川をきらせ
て川下を歩卒まくるをれい大勢のいきおひをもし馬筏ふ
くまくるゆへ危きてあし武蔵守利隆公諸卒天満川
をまくるをれ右の如く川上を馬武者を一同はぐりと川
へ乗込でまくしをれ川下を歩卒まくりしに何の苦悩
もなく悉渡せりとあり大勢の中只一騎ちがくてさし物
上へ浮てひらくせくども急なる場ゆへ引上る人なく
水ま没し死うり右の一騎溺を死せしより外ま末々まで

一人も水ま没しなくなりあり
○大阪陣のをれ利隆公をなくの武者奉行須賀伊豆舟戸帯
刀両人あり武者奉行い我組の士卒あるい成がくし番
頭の隠居などの如く人の重んじて年老ある武功ある人を
用ゆべきなり
○大阪の役ま池田の諸士頬當をかけくるをれ一人もなし
上使の城和泉一人頬當かけくるとあり然ども歯をれ
老士なるゆへ頬當をかけなるをれを忍の緒をきるをれ
ハ口をくくて物言ひ所をゆゆくかくるくとくなり
○曽の頭一ちのをつくくあくくあり鉛子あくくたるをれを
ひゞ死つくく氣も聳くくゆくくまと大阪冬陣のあくくひの

之紀井伊家の物頭井樓へあづり遠見せしに鉛子來りて
冑よりのうり卒ふ仆まうてふ引あうて冑をぬがせうて
ぬげずやううてぬげたりとゆへども疵不見いろ〳〵尋
うる處額の米かうの所よりのうり玉半分あどづけ冑へて
こたりうまを冑つまりうるゆへあり終よその疵まて死し
たりうれり

○上杉謙信の馬ぶうて大根の折かけうん赤根地折掛旗ふ
大根を白くのうてなるものあるりと也

○大阪夏陣五月七日天王寺口へ秀頼のひううんの御馬驗
出かうまうるゆ紀関東方ふ秀頼の御馬出真田左衛門佐
先手ふて切かうふとのふ風説あるといるゆ関東方の惣軍

ふの見のちもるく崩たち諸手悉く崩うるが追ふうな
く大敗軍とあり井伊家士小笠原傳兵衛三百石嫡子と若黨
と以上三人ふて直孝の赤根の四半ふ金の井の字ふ馬印
を捨て北うるを取て押立たるを見て總軍ふ引やまを
掃部頭殿の人勢ふ返しうるいと言て銘々よりて返し
ぶうりて終ふ御勝利とありうるとなり小笠原
後ふ加増ふて取立らまうるうれり右の敗軍の之紀銘々
ふやまを返せうと云ながら北うるとあり何のうちもふ
く北うるに何ともすべきやうなれのなりと義郷の咄
ちり右の馬印を立るを見て惣軍かうたるを見て破軍星
の尾返ふ合うると云たるやうの敗軍の之紀

三ノ八

両御所様の御旗本大崩れ　家康公も度々御腹をめ
さるゝとなりてゝ御近習大久保彦左衛門ゐどもえ
らまゝるゝなり　後々まで　家康公御武功の御物語
りの子ども此御敗軍のとき已ふ御腹めされんとなるを
度々御いさめ申て御腹めさるゝ終に天下の御主となし
奉ると大久保申されゝるとなり

信玄嫡子義信と不和のおこり川中島合戦のとき義信を
旗本組の右備なり然るに夜中ふ謙信犀川をこゑ〳〵近々
と備へ無二の合戦を持てかゝらるゝを見て旗本備へ
義信をやり信玄い義信の備へ處旗本組の右備ふ居らゝ
れゝるふ謙信信玄の旗本備義信を切崩し義信も數ヶ所手

を負ゝ〳〵に信玄居らゝるゝ中へ信玄の居らゝるゝ右
備へ切〳〵かゝゝ信玄の床机居らゝるを太刀ふて切ら
ゝるを信玄圍みて受られ側より中間頭原大隅鎗ふて
つれゝるふつれゝゝ謙信の馬ゑ三頭を招き馬走り出
て退ゝるゝ中へ討ゝゝ此合戦以後義信を
強敵の謙信無二の戦を持ゝゝる中へ旗本備居てらその
身の危きを以て常々不和なるを以て義信を旗本備へ床
机をかゝへ捨殺しふせんとの工なゝと思ゝゝ父信玄をうら
ゝ恨ゝ飯富兵部ゞゝ〳〵ゝ反逆有て信玄怒り善
信を切腹せ〳〵めらゝゝゝと上泉義郷の咄なりゝゝゝ其
證據なゝ甲陽軍鑑ゝゝの合戦ゝ信玄の旗本備崩ゝ信玄

い何所ゝ御坐あるやら不知混乱ゝる所へ謙信太刀
をぬき持て信玄の床机ゝ居られゝを切られ信玄團を
りゝ受らるゝと思ふい信玄と義信と床机をかくら
るゝる證拠ゝり法令厳なる信玄旗本の備ふあゝ
御坐所ゝるゝと云程のゝゝ成なり

○大阪ゝて日本の諸士入交りて戦ゝたるゝ組打いゝれ
なり井伊家の士石川宗左衛門江坂清次郎両人組打せり
其首尾ハ城兵突て出るゝ城兵と石川と鎗を合せた
るゝ相手の敵兵もやをゝく仕合ゝるゝ小ゝ
たゞひふ入ゝ鎗をすゝく太刀打よりゝ敵石川ゞ太刀を
持ゝる掌をきり付け無名指小指を切をゝ

太刀を捨て手と手とゝり合組合ゝる小敵ハ痩弱の男石
川ハ大兵ゝて腕先もゝりゝる敵ゝ組伏ゝれゝ初
ふ太刀ゝ右の無名指と小指を切られゝ首を取
べきゝなゝ我ゞ方をゝ味方の兵江坂清次郎
きゝひゝゝ言かけて是首ゝ彼へとゝゝ江坂
ハ十七歳の若武者なるゞ他人の組伏ゝる敵の首を我等
ゝ取るゝきゝひゝゝ答へゝる石川右の手を見
せゝ如此指を切らるゝ首を揚ゝ云ゝを
聞て其ゝ敵の首を揚ゝゝ井伊氏の本陣へ右の
首を持参ゝる江坂ゝ元来石川ゞ組伏ゝる首を揚ゝ
るゝふ中ゝ我功ゝゝ云ゝゝ両

人ゝも御感ありて同列に加増ありけるとなり
○又藤堂氏の家士田中権左衛門弓を持敵と出あひけるに
ひさしく矢声をかけて矢を放しけるに或敵急に進み来り
十文字の鎗にて突かゝりしに田中ゟ矢をひきかけたる弓を鎌
にて突切けるゆへに弓を捨て敵と組合敵を組伏て首を取
たりしとなり凡大阪陣のうち諸軍の中にて組打は井伊家
の石川江坂と藤堂家の田中此三士の両くゝ打込ありしと也
○大阪冬陣のうち井伊家の諸士真田出丸の塀下につめしさ
ゐにうち堀際の柵をこえてはや堀際へ付けるに柵をこえゑ
うちさし物邪广になりけるゆへあまりをぬきて鎗に持かへん
て柵を通りしに上泉義郷は指物をかゝへりまで紫革に

て結び付けるにさけう結てよろどたふらひけるうちに油
頃心易出入して目をかけたる足軽の小頭何某義郷のあ
とにつゞひて柵はのぞきけるに義郷のさしものの留めが
らくをうけけるを見て義郷の傍よりり治部左衛門
様此場へさしつかへけるぞと云て件の指ものの留の緒をと
きてたまうけるゆへ指ものをぬきて鎗は持そへ柵をこえ
あそて塀下へ着けるとなり是は義郷指ものの留をせられ
ける證拠なりその餘の諸士はさしものの留をせざるまで
早速はぬきて柵をこえよるとなり右の足軽小頭右の
場所へ出て義郷のさしものの留の解ざりけるをみれは其
場へつれける證拠として大阪の役終り治平になりける

と云賀へ三百石少て身上済さるもあり

○上泉義郷曰越前少将忠直卿後号一伯　東照宮と不和の起原ハ大阪ゟ諸手の持口の図を銘々ゟ為て見よと

の上意のと云越前の持口の敵城のかまへをさるもの

ゟ彩色図して出されるを　神君一目御覧有て役

ゟ立ぬ男なりと有て御見限有て其のち御不和也しとな

り惣じて敵城の図あどを兼相まざるを図して出すこと

古法なりとあり　神君ハかまへの古法よく御覚あり

て武の法なるもの御吟味ありしる名将なりし故ゟ天

下も御手ゟ入りしと申されなり

○大阪の役ゟ木村長門守を井伊家へ撃る首尾ハ木村

江の村屋へ入て割合の昼飯を食し居るを井伊家の仁候

磐若内膳見て帰り先手の将庵原助右衛門へ告ぐ庵原

鎗を取てかゝるゟ木村も走出て鎗を合せ二間一尺五寸

の直鎗その頃北国流と云てもの〻ふ木村も免許を

得る功手なるもの〻あれ鎗を以て庵原ゟ内曽を二三ケ

所も突られぬる鎗の穂ゟ切突かゝるゟ

突ゟ頬の辺ゟかゝる手なるもの〻突ぬひて突たを

すとゟかゝる庵原ハ一間半なるゟ身の七八寸程ある鎗

をべてゟりとゟりのけて木村を鎗付て突仆しゟ

あとより井伊家の若士安藤長三郎来てその首を揚んと

するゟ庵原揚候へとゟ安藤ハ首を揚させ木村ゟ腰

小指なる白熊の旋を引ちぎりて庵原が腰よつけて引と
すくるやうなり此首誰が首なも其をれい知されども白旋も
へよ大将分と見へくるゆへ後證のためよ庵原をうて
腰よ付くるやうなり後よ木村が首と知きるゆへ安藤も
元來庵原氏鎗付たるゆえ首を揚くるやうと断きども庵
原ハ井伊家の老臣年七十有餘なれ常よ肱よ珠數をかけ
く念佛のみ唱へくるよ向來る敵ゆへよやむことを得ズ念
佛を唱へながら敵の鎗をもぎ鎗付くるゆへ已が功とせ
ど若輩の士ハケ様よ名ぶり死士の首を取くるを功名も
顯すゆへよ強て安藤よゆづりくれ故よ首帳なの安藤が
姓名を記し出して安藤が武功くしく今小至て木村を

安藤がうちとりくるると天下よ称するハ庵原武功ゆえを
くるしき仕形ゆへなれり右上泉義郷の直談なり詳小
此合戦のて三所戦記よくくれり木村勇士なりといへ
ども若將ゆへ昼食の喰時分期をゆくれくるゆへ昼食を
喰かくたるを死敵よ見付られくるゆへくれこの飯を
二三著わど食しくるゆへくれ少し喰かくるを迄なり
しく撃死のち昼食を食もくる村屋へ入く見しか右の
如くなりしくとなり是亦義郷の咄なり

○松平讃岐守殿の具足屋南都岩井孫四郎咄小日南都知足
院小塙の團右衛門甥植村藤左衛門と云もの所持せ
頬當なり是則ち塙團右衛門所用の頬當なりその製面頬

小凝掛を不仕骨惣地を薄赤く人の顔の色の如くかぬり顔
に鬚をもやしたる是甲冑を着し喉輪をうけ只行軍
の行装に喉輪の上に此面頰をかけんが為に如此製し
たるなり右の面頰に彩り物に紀及の雑賀孫
一の作の由なり團右衛門と舊友にて造與へしとなり其
孫一に武功の士にて慶長五年伏見の城にて鳥井彦
右衛門殿を打たりしる名士なり細工の名人にて殊に頰
當の製形無類にて函人の家にて名作と称するとなり右
の植村藤左衛門に極貧の浪士にて南都知足院に縁有て
知足院の住持二三代にて居て則知足院にて病死し
たりとなり死後屍を沐浴せしむるにて裸禮なりて見
るに右の方腰に下帯小金子十両付てあり此金子數年付
置たりと見へて腰に此金子のあるにて居る処にて居る
るやなり右の藤左衛門至極貧窮なりとなりしかども具足
一領鎗一本を放さずして所持せりとなり則右の具足は
中小件の類當も具し置たるとなり

○氏康公松山を攻るに紀信玄に救を乞ひ甲及の士
米倉丹後守子彦十郎炮玉に中て死なんとす甘利左衛門
が組なるべし甘利米倉が陣屋に至て傷て見る手負の血胴
に落て死なんとするに芦毛馬の糞を水に立て用へ必功
有といふものなり米倉が僕あるを調じてすむ米倉不
飲して曰あるを飲で必可生可死未知らず果して死せ

を不飲とも有らんかぎり生きるとも畜類の糞を飲む其
耻を如何せんうゝ服せば甘利色を正して御辺の言曽て
理なり命を保て忠をあるべき教を行ふを道の重きふあらずや
獣糞をのゝしる耻を軽きふあらずや小辱を不忍して大道を
捨るハ狂なるに似たり是勇のゝ有て智を不尽の失なり
もゝ薬のゝみゝきてもあらん我先へ試むべしとて二口
三口呑て舌打して甚呑よとて米倉よりゝ米倉理
伏して則服しゝ快復するを得たり信玄聞て甘利を誉ら
るゝと甚し或人曰米倉終に糞汁をのまべしして死せん事
ふのゝ僻なるもれ是案良を思ひ類の薬を忌嫌風俗
なるより後来幾人か横死せしも計べからず且陣中みだりに専ら

如斯手軽き薬を以て珍とすべし

○佐野修理亮宗綱ハ下総唐沢に有足利の長尾但馬守顕長
と郡邑を争ふ或る時宗綱ハ岡崎山ふ陣し顕長ハ唯木山
に屯を両山の間ふ小川あり之を隔て日々足軽攻合の
るゝ未勝敗をわかたず既に顕長兵をかへり其体厳粛
なり宗綱も同師を引返んとす密に兵を分つて山間の樵
路より兵をすゝめ大沼田といふ所ふ廻り顕長が前路ふ
今出顕長ふ是を知らば宗綱も陣拂して段々ふ引行今ら
漸遥に隔りまゝ後襲の恐なしと思用心の備緩怠諸勢の
足を乱して引行宗綱ハ廻備の出合程を量り俄に旗を逐
ひ顕長追廻備の勢横合ふ出て顕長刀備を突ん顕長大ふ

敗して追討に逢その甚多し宗綱思ふに利を得て唐沢
に加へる
○畠山修理大夫義隆能登を領す毒害にあひ卒して後家臣
遊佐弾正温井備中長對馬を始十一人その勢二千計七尾
の城を篭り信長に從ふ上杉弥五郎義春は義隆の伯父也
越後に有て此由を聞謙信に乞て七尾を攻やとして城兵を
誅せり謙信義春が先登の功有を以て能登は代々畠山の
領なり義春に頼んとの内意あり能登の兵士あまを聞て
義春出生有らば我々も同く世に出んと追々馳來る
○駿し謙信柴山といふ所に陣し惣人數の押前を見んと
〻謙信は床几に腰をかけ義春は側に畏り居り能登先鋒

の人數美々しく物具に〻出來る謙信人を遣してあまを
向彼勢上杉弥五郎が勢なりと答次に通るもそれ次に通
るもそれ弥五郎が勢なりと名乗駿しく多勢なり謙信氣
色変じ暫して弥五郎を呼三好宋三は五幾内みく弓
矢功者の名將なり宋三常に人數は難遣ものなり三百騎
より上の勢を遣つるものなりと度々云しと聞くり
と言てふたび詞なし謙信死去すでも弥五郎をみちま
へ勘當同前にて能登に與へ
入巷と号ず
○佐久間河内守實政物がたりに大阪御陣のさい鳴野合戦
のさい小栗亦市吉忠と我と両人撿使に仰付らる但し

十一月廿五日小西人鴫野へまかり明日今福口の柵をい
わたすべく吉佐竹義宣仰付られ屋代越中守伊東右馬允安
藤治右衛門遣さる景勝も明日鴫野口の柵をさり申さる
べく吉仰出さる直江山城守兼讀申候へ一昨日奥より
到着仕候中人馬の足を休め其上のてを仕度と申佐久
間小栗申候へ謙信以來着陣をなさるも御一戦と兼り
及び候山城へいるゝことを申されて候と断り候へば直江上
意重く候間明日さをつめ申べく吉御請申上候廿六日早
天より景勝人數を出さる候城方の柵へ井上五郎右衛門
渡辺内藏介并大野修理亮治長手のものに加り山市左衛門
尉吉正小早川左衛門岡村椿之助竹田兵庫其子大助二千

余にて柵三重をり持固め候前の夜景勝へ直江山城を呼
備組をさる直江申候へ老功ゆへ候申へ安田上総介を
先手に申付二の先へ須田大炊介申付候とさる景勝を
まへの〳〵死配立ゆり二の目功者ゆへ軍勝をゆ
〳〵須田を先手ゆ安田を二の先に立べしと有ゆ付直江備
をさりかへ申候あをゆより須田備へ競て二の先に安
田手より手柄〳〵見せんと勇み候安田備へ先手を二
の先に立られ口惜存候先手崩より〳〵二の手ゆて
もり返〳〵一手柄せんとたゞむ申へ両備の士卒中々勇
氣十倍ゆなる景勝勇才凡人の及ぶ所にあらずと感状あ
をさる廿六日曙に大阪方へ取かゝを山市左兵衛大将を

鉄炮大将井上五郎右衛門等柵の外へ出て防戦ひ候須田
大炊先手ふて景勝勢直先ふかゝ是候勝負數度ある有候
上杉方多功豊後守手柄高名より北条清右衛門上泉主水
櫻田獄大膳八左衛門同彦六郎手柄をゝゝ討死す須田
大炊下知〳〵て遂ふ打勝大坂方井上五郎右衛門を討そり
柵二重をそり押込申候大阪方山市左兵衛渡辺内蔵介敗
軍その場をそり敷候景勝ハ鳴野の横堤ふ旗本を立直江
山城守ふ申付鉄孫左衛門ゟ鉄炮三百挺遣〳〵物場より
ちる〳〵南大和川の堤をゝりきり蘆谷ゟ足軽を立取
固候上杉衆申候ハ小口そゝる〳〵脇をそり固め候と
不合点ある手配とつゝ死申候その日牛刻ゟ大阪七組

青木民部少輔一之伊東丹後守長實速水甲斐守守之中島
式部少輔氏種野々村伊豫守雅春真野豊後守頼包堀田図
書助勝嘉それ脱ハ天満口普請場ふかり〳〵ゞ鳴野今福両
口破ゟ候由承り天満より鳴野へかゝ付候城よりそ
大野修理亮治長木村主計頭宗重渡辺内蔵助紀竹田永翁
等かけ出候上杉先手須田大炊介長義ハ石坂新左衛門百
人鉄炮ふゝ備一の木戸口をかゝえ打立申候半脱ぞり
せり合候へゞも大坂方大軍ゆへ真黒ゟかゝ是候上杉方
鉄炮大将石坂新左衛門場をそゝ討死組勢廿餘人討ゟ
須田大炊頭立られ候へゞ二の先安田上総介兼て備を脱
へ押出〳〵立候ゆへ須田備ハ景勝旗本前へゝゞ申候此

さて上杉方島津玄蕃い敵大勢よりそり合沼の中へ突落
されて起上り鎧を合せ大防方をつかちし手柄仕り高名
松本助兵衛北村茂助もうんぐ〳〵ふたゝうひ両人ともに高
名仕り候市川左衛門針生市之助原庄兵衛駒沢与五郎を
ちぐ〳〵上杉家寃竟の兵枕をならべ討死仕り候須田大炊
備やぐ〳〵かゝる景勝旗本前備い相原常陸介親憲
鉄炮三段ふ立金の鎌の馬印をそりて御意ふゝ候間須田
人數両方へとられ退候へと呼馬印をそり候へば須田備
両方へ引そり候杉原下知して追ひきゝる敵を引らけ
鉄炮をうち立候所を二の先ふて脇へ扣へ候安田上総介
そいをそりて横合ふやをを入を候へ大阪方惣敗軍

ふなり申候安田う手柄中々耳目を驚うゝ候大阪方杉
森市兵衛湯川次兵衛由辺八左衛門幡枝勘ケ由米村加々
右衛門平山藤蔵茨木五左衛門安宅源八寺返し合防候へ
ども安田上総急ふ操立候ゆへ大防方うづを申候安田勝
ふ乗て小早川左兵衛岡村椿之介竹田兵庫同大助を初免
追討ようちそり候その内穴沢主殿介ハ長刀の名師ふて
秀頼公の師匠ふゝ候高所ふ返し合穴沢主殿介盛秀と名
のり候を上杉方坂田采女組打ふ仕り穴沢ゞ首をそり候
穴沢長刀を直江家来折下外記分取よ仕り候そて上杉先
手の大将須田大炊見へ申そば行衛不知ゆへ討死と存候
所よ敵中よ交り大炊手柄なる太刀打直取の高名三ツ

手疵一ヶ所蒙り若黨五人あぐら高名して出來り候ゆへ
諸人あぐ申候扨柵際ふ〻大阪方と上杉方鉄炮軍既をう
つを此ゝ紀今福口へも木村長門守重成後藤又兵衛年房
堀田図書介勝嘉出て一戦佐竹義宣先手渋江内膳討死梅
津半右衛門戸村十太夫鑓を合手負引退く加勢を乞候故
杉原常陸百五十挺の種ゞ島を添てさ〻遣川の中洲より
打立候ゆへ木村長門守後藤又兵衛引退く佐竹それ場を
とり返さそれより杉原も須田安田ふ加へり鉄炮軍數刻
ふ及び候ゆ付御旗本より五の字御使番追々ふ來り堀尾
山城守忠晴を御入替有べく間景勝ハ元の陣へ引とり申
べき旨頻ふ仰遣されれ候堀尾山城守へも早々景勝ふ可二入

替旨仰付らを候忠晴畏て堀尾河内同修理前田丹後二百
余遣し候へとも城方より大筒を出し候ゆへ堀尾人數進
まぞ候へとも忠晴より重て伊賀衆手負八十人遣しとふ
御使番重々堀尾ふ場を渡さべしと仰遣され候景勝無與
しと場をもとし引取べしゝ誰の差図ふて候ぞ更ふ承り
届ぞ候上の御意ふてもし罷りならぬ軍の習先陣を爭ふ既
ハ一寸増と兼り候今朝より粉骨してとり敷候場を人ふ
もとし引取法ゝ有べき少も引取て罷ありぬ由景勝が申
と上へ仰上らをよと云て少も不退候朝より景勝ハ鎧も
不着床机ふ腰をかけ城ふ向て脇目もふらぞ馬廻り三百
余鑓立頭を傾け畏を居て先手の合戦見物ふ景勝ハ側

ふハ浦地日の丸大四半と毗の字ゟ大四半只二本ふ浅黄
の扇の馬印押立候そゟ武者立行義の正しゝそと中々言語
同断なり士卒景勝を恐るゝ〻〻敵よりも甚しゝ下知の用
〻武者拵へ比類なそ〻〻ども此そゝ丹羽五郎左
衛門長重ハ上杉後ふゝ陣そり候先手の戦を見ゝ景勝
旗本へ参らそ候へども上杉家作法ふゝ備の中へ不入候
ふ付先手へ馳加り申され大阪方次第よかゝゝ候そゝ直
江下知ふゝ大和川堤芦谷の柵場より鉄孫左衛門鉄炮を
横合より込撃々々〻せ候ふ付大阪方柵を持〻不叶
遂ふ敗軍しそゝ場をそりしゝ景勝の勝なり申候堀尾
人数も柵を廻ゝ大和川洲崎より鉄炮をうち申候そゝ日

城方鑓の名師渡辺内蔵介大廷仕り候前日野田の藤見の
そゝの喧嘩ふゝ手柄有之候べとも今日ハ上杉方ふ追立
らそて人先ハ廷申ふ付て
「渡辺ゞ浮名をゝゞす鳴野川敵よりのふてハ目ハゝゝ介
鑓兵法名人ふゝも武道ゝそしハ役ふ立ざるゝ勿論ハ候
今日景勝下知ふゝ大和川の堤を堀きり柵をゝり鉄孫左
衛門をもゝ〻置候合戦場よりハ服ゝて候ゆゝ皆々不審
仕り候柵も堀切も敵付てゝそそ尤ふゝ候そゝもゝそゝふ
て候とつぶやき候所ハ後の合戦ハ鉄ゞ手より横鉄炮打
候ふ付遂ふ大坂方敗軍景勝の勝ふあそ申ゆゝ諸人景勝
の勇智浅からざるを感じて名将なりと舌をふるひ候つ

ふ由その晩鳴野より佐久間河内小栗又市住吉御本陣へ
まかり帰り合戦の次第申上御次之間ふて小栗又市申候
きさく今日能打所有しを打候へと申さるとも日暮
かゝる候さく不打ゆゑ多さに直江ふ足軽をか
せ我進て討べしと云さるとも日暮かゝる候さく足軽を
かさに残多させんかさなりしかゝ障子を隔て
家康公御聞なされ其ゆゑ御氣色かゝり御きげん損じ
やあ市已ゑゞ分ふさ景勝武辺ふ誹りさるハ無用なり
推参なると申大ぜいけめとさんゞ御ものゝ事ある亦
市赤面さて罷り立候鳴野合戦の翌日　両御所様御同
道ふさ鳴野口御巡見なされ上杉陣場御通りかさて貶

上杉惣手より城へ鉄炮をつるべ放を但御大将御巡見の
貶の作法故實の由なりさて景勝町場道茸破をなり水を
酒中之掃除きらびやかなるゆゑ景勝も直江一人供
ふさまり出手を地ふつゞけ御目見　家康公仰られ候
ゆゑ今日ハ當表ふさ其方人數骨折候ゆゑ御懇の上意ゆゑ
景勝御請童部ゆさゝひふて御坐候ゆゑ何の骨折候てゝも
無御坐と御挨拶申上ゆゑ候後日ふ上杉家人須田大炊杉
原常陸島津玄蕃鉄孫左衛門御感状下さるゝ候皆々御前へ
召出されて如此三人ハ御感状を戴て罷立杉原常陸討御
前ふさ御感状ひらき拝見仕元のごさく巻納いたきて
懐中仕木多佐渡守ふ向て御吟味御文言のなる所もなゝ

奉仕合と申上まつるを立彼ゝる人感しかめ申彼それ砌上
意ゆゑ今度上杉家中手柄仕彼と仰らを彼常陸介ゝ
ゝ輝虎已來弓失のあゝまつりのゝり申彼ゝゝ御挨
拶申ゝ上ゝゝり立彼諸人感ゝ申彼上杉二の先安田上総
介今度鳴野ゝゝ第一の手柄ゝゝ横申りあゝ大阪方突
ゝゝ味方の勝ゝゝり彼へゝも直江山城と中ゝゝ紀故
書付ゝ入ゝる申ゝ上聞ゝ達せゝ御感状不被下彼その後
景勝ゝ所へ皆々を呼出ゝ今度鳴野表ゝゝ何も精を
出ゝゝを彼て満足ゝゝ彼去なゝゝ大阪弱敵ゝゝ輝虎
已來武辺仕なを ゝる各なゝまゝ氣遣ゝるゝゝのゝなけも
なゝゝゝと申ゝる安田上総介進ゝ出各ゝ仕合よゝ上

聞ゝ達ゝ御感状拝領ゝゝ目出度存彼我等一人ゝ誰
も取次不申御感状拝領仕らゝ彼へゝも昔より數度合戦
ゝ隨分御奉公申上て人をゝ越ゝも人を越らをゝ彼その
上今度程のゝて我等功を立申様無之彼今よゝゝめず珍
ゝからゝるゝを彼就中我等を不限屋形様へ身命を擲
て稼彼曾て公方への御奉公ゝゝゝゝ仕らず彼ゆへ御感状
少ゝも望を存ゝゝ彼已來ゝゝも殿様へ御奉公ゝ命を捨
可申彼公方へ奉公ゝゝ仕るゝゝ子細なゝまゝゝ御感状美
ゝゝ無之と申彼ゝゝ杉原常陸を今度御陣ゝ重代の物
具古く見苦ゝゝて猿樂の法被を衣ゝ大坂へ立
家康公御覧ゝれ上杉家古き風ゝて錦の甲直垂を着た

皆々後学に見置候へと上意成候よし杉原老武者殊に
をゞけ者ふて古き鎧見苦しくとも上に能の法被を着て
ちらと也後日に杉原帰陣〳〵皆々に語候へ〳〵扨々今度
の思ひよらぬ御感状拝領して子孫の宝を得たるとや其
内へ今度大阪御陣へ子共いさゝひのつぶ〳〵打合の様
なるざまにてこなるべく別に恐しきこと骨折こもりたり
昔関東陣越後るどふ〳〵今日死るゝ今〳〵と思ふ〳〵成
烈しき合戦に明暮逢うたれども御感を取らず今度は
様なる花見同前の上様より御感状をうけと大に笑ひ
る由

国立公文書館
National Archives of Japan